

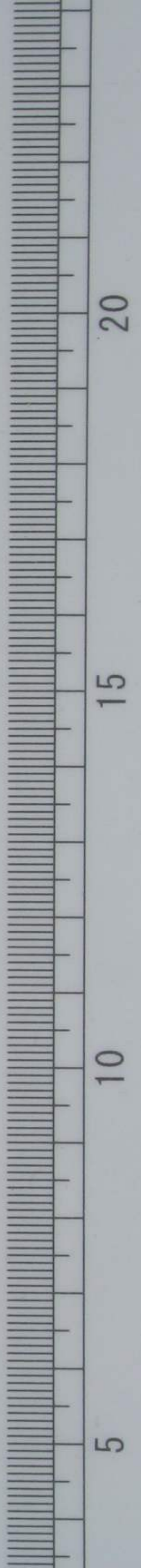


阿蘭陀書房

あぐなれすあ
選詩小情抒
續裝及著秋白原北



東京
阿蘭陀書房





北原白秋著及繪
抒情小詩選
あすなろ

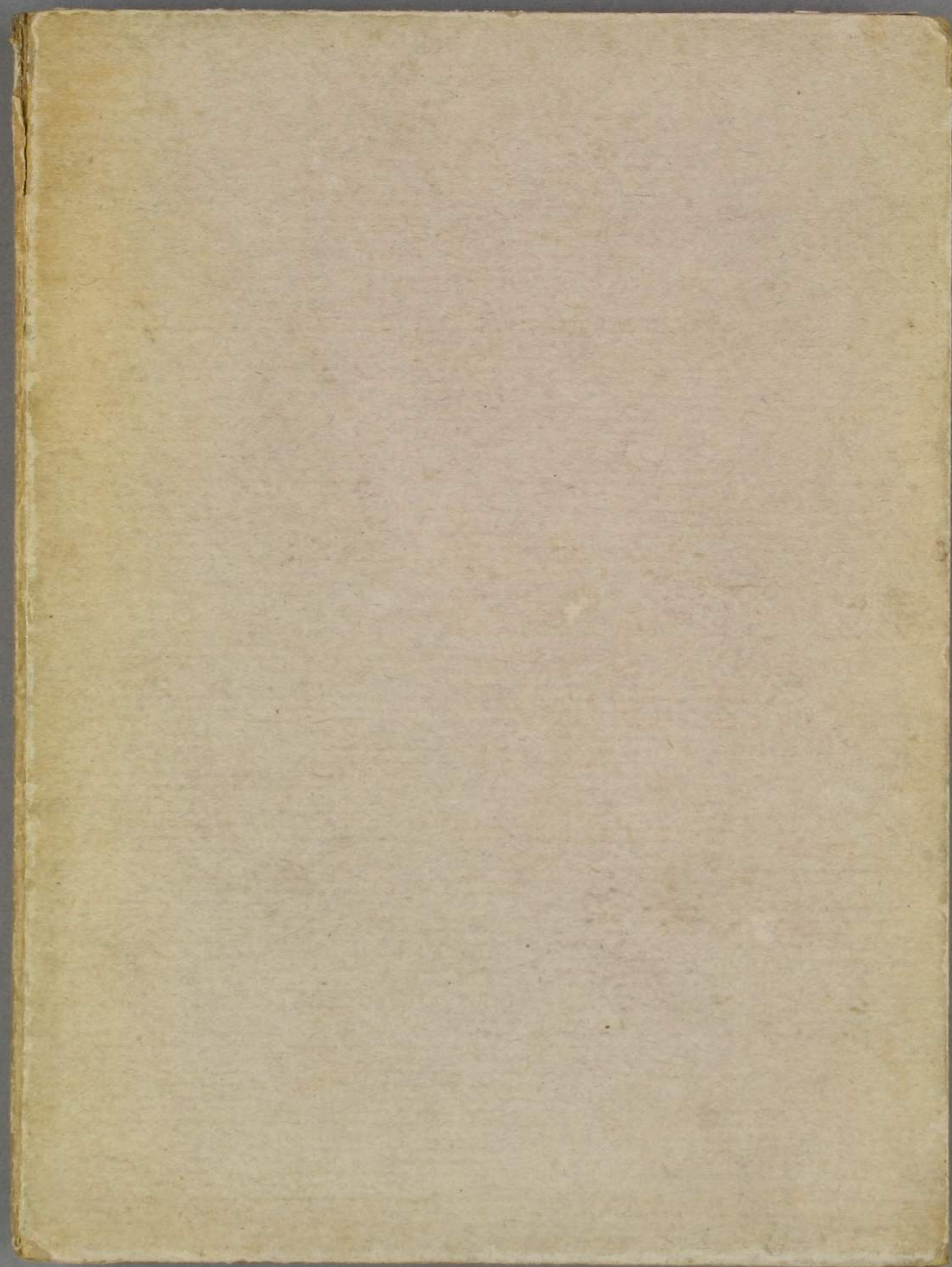


東京
阿蘭陀書房

小抒情詩

わすれなぐさ

北原白秋著



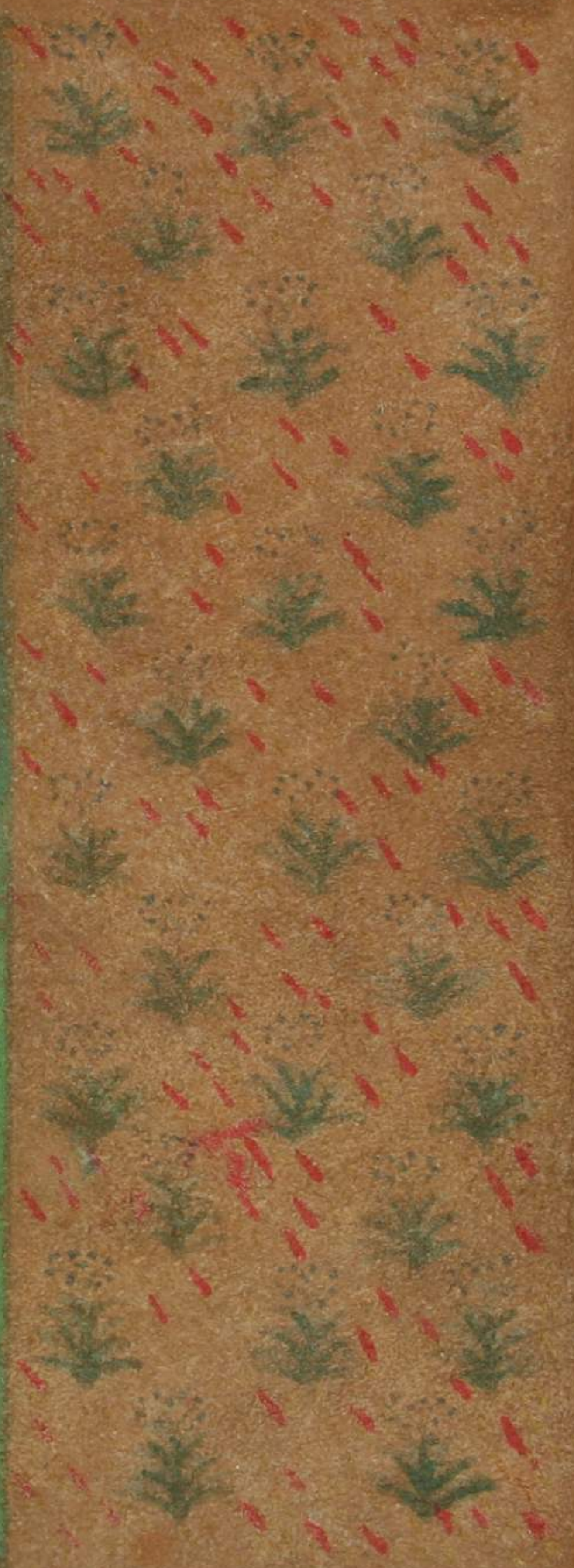
わすれかれぐさ

白 秋





阿蘭陀書房



鷓鴣藏書

わすれなぐさ

抒情小詩選

選詩小情抒

さぐなれすわ

著秋白原北

幀装及



京東

店書術藝

房書陀蘭阿

わすれえぬひとびとに

はしがき

少年老い易し、麗人は刻を千金の春夜に惜む。われらがわかき日の小詩はまさに涙を流して歌ふべし。瑠璃いろ空のかはたれにわすれなぐさの花咲かばまた過ぎし夜のはかなき戀も忍ぶべし。ここ

に選び出でたるはわが幼きより今にいたるあらゆ
る詩集の中より、ことに歌ひ易く調^{リズム}やさしき斷章小
曲のかずかず、すべてみな見果てぬ夢の現なかりし
ささやきばかり、とりあつむればあはれなることか
ぎりなし。かの西の國の詩人^{うたびと}が

ながれのきしのひともとは
みそらのいろのみづあさぎ
なみことごとくくちづけし
はたことごとくわすれゆく。

と歌ひけむ。なにごとものながれゆく水のながれの
ひとふれのみ。忘れえぬ人びとよ、われらが若さは
過ぎなむとす。嘆かば嘆け。羊の皮の手ざはりに
金の箔押すわがこころ、思ひあがればある時は、紅^{ルビ}玉^ビ
サファイヤ、^{エメラルド}綠玉、^{ダイヤモンド}金剛石をも鏤^{カリ}めむとする、何といふ
哀^{かな}しさぞや、るりいろ空に花咲かば忘れなぐさと思
ふべし。

大正四年四月

白 秋 識

わすれなぐさ目次

あかき木の實

あかき木の實	三
硝子切るひと	四
日ごとに	六
黄金ひぐるま	七
かへりみ	八
わすれなぐさ	九
よひやみ	一〇
わかき日のゆめ	一二

断章

一、今日もかなしと思ひしが	一五
---------------	----

十六、哀知る女子のために……………三〇
 十七、口にな入れそ……………三一
 十八、われは思ふかの夕ありし音色を……………三二
 十九、あさみしあはれさみし……………三三
 二十、大空に入日のこり……………三四
 二十一、いとけなき女の兒に……………三五
 二十二、わが友はいづこにありや……………三六
 二十三、彌古りて大理石は……………三七
 二十四、泣かまほしさにわれひとり……………三八
 二十五、柔かきかかる日の……………三九
 二十六、蟬も鳴くひと日ひねもす……………四〇
 二十七、そを思へばほのかにゆかし……………四一
 二十八、あはれあはれすみれの花よ……………四二
 二十九、梅の果に金の日光り……………四三

二、ああかなしあはれかなし……………一六
 三、ああかなしあえかにもうらわかき……………一七
 四、あはれわが君おもふ……………一八
 五、暮れてゆく雨の日の……………一九
 六、あはれ友よわかき日の友よ……………二〇
 七、見るとなく涙ながれぬ……………二一
 八、女子よ汝はかなし……………二二
 九、あはれ日のかりそめのものなやみ……………二三
 十、あはれあはれ色薄きかなしみの葉かげに……………二四
 十一、酒を注ぐ君のひとみの……………二五
 十二、女汝はなにか欲りする……………二六
 十三、惱ましき晩夏の日……………二七
 十四、わが友よ……………二八
 十五、あはれ君我をそのごと……………二九

三十、あはれさはうち鄙びたる……………四四
 三十一、いまもなほワケネルの調に……………四五
 三十二、わが友は……………四六
 三十三、あはれ去年病みて失せにし……………四七
 三十四、あああはれ青にぶき救世軍の……………四八
 三十五、縁日の見世ものの……………四九
 三十六、鄙びたる鋭き呼子……………五〇
 三十七、あはれあはれ色青き幻燈を……………五一
 三十八、瓦斯の火のひそかにも……………五二
 三十九、忘れたる忘れたるにはあられども……………五三
 四十、つねのごと街をながめて……………五四
 四十一、かかるかなしき手つきして……………五五
 四十二、あかき實は草に落ち……………五六
 四十三、葬のかへさにか……………五七

四十四、顔の色蒼ざめて……………五八
 四十五、長き日の光に倦みて……………五九
 四十六、かなしかりにし昨日さへ……………六〇
 四十七、廢れたる園のみどりに……………六一
 四十八、なにゆゑに汝は泣く……………六二
 四十九、あはれ人妻……………六三
 五十、いかにせむ……………六四
 五十一、色あかき三日月……………六五
 五十二、柔らかなる日ざしに……………六六
 五十三、われは怖る……………六七
 五十四、いそがしき葬儀屋のとなり……………六八
 五十五、明日こそは面もあかめず……………六九
 五十六、色あかきデカメロンの……………七〇
 五十七、あはれ鐵雄……………七一

二、からしの花の實になる……………八七
 三、酒袋を干すとて……………八八
 四、甑すり唄のこころは……………八九
 五、麥の穂づらにさす日か……………九〇
 六、人の生るるもとすら……………九一
 七、からしの花も實となり……………九二
 八、櫛の實採の來る日に……………九三
 九、ところも日をも知らぬと……………九四
 十、足をそろへて磨ぐ米……………九五
 十一、ひねりもちのにはひは……………九六
 十二、かすかに消えゆくゆめあり……………九七
 十三、さかづきあまたならべて……………九八
 十四、その酒のその色のにほひの……………九九
 十五、酒を醸すはわかうど……………一〇〇

酒の徴

一、金の酒をつくるは……………八五

五十八、ほの青く色ある硝子……………七二
 五十九、薄青き齒科醫の屋に……………七三
 六十、あはれあはれ灰色の線路にそひ……………七四
 六十一、新詩社にありしそのかみ……………七五
 六十二、かくまでもかくまでも……………七六
 六十三、かかる窓ありとも知らず……………七七
 六十四、わかうどのせはしさよ……………七八
 六十五、夕ぐれのものあかき空……………七九
 六十六、夕日はなやかに……………八〇
 六十七、美しくしきソフイヤの君……………八一
 六十八、失くしつる……………八二

片戀

初戀……………一六

あかき林檎……………一七

水蟲の列……………一八

カステラ……………一九

ふるさと……………二〇

泣きにしは……………二二

時は逝く……………二四

片戀……………二七

芥子の葉……………二八

春の鳥……………三〇

あらせいとう……………三一

あひびき……………三二

見果てぬ夢

十六、ほのかに忘れがたきは……………一〇一

十七、酒屋の倉のひさしに……………一〇二

十八、カンカンに身を載せて……………一〇三

十九、悲しきものは刺あり……………一〇四

二十、目さまし時計の鳴る夜に……………一〇五

二十一、わが寝る倉のほとりに……………一〇六

二十二、倉の隅にさす日は……………一〇七

二十三、青葱とりてゆく子を……………一〇八

二十四、銀の釜に酒を湧かし……………一〇九

二十五、夜ふけてかへるふしどに……………一一〇

洎芙蓉……………一一三

見果てぬ夢……………一一四

巡禮……………一五一

薔薇の木……………一五五

日光……………一五六

麗日展望……………一五八

佇立……………一五九

やさい……………一六〇

ながは……………一六一

かぜ……………一六二

ながめ……………一六三

つなで……………一六四

海雀……………一六五

あそびめ……………一三四

うつそみ……………一三九

罪びと……………一四〇

野晒……………一四二

なまじおもへば……………一四三

涙……………一四四

眞實……………一四五

自愛……………一四六

二人で居たれど……………一四七

幻滅……………一四八

ふたつの鏡……………一四九

肖像……………一五〇

現……………一五〇

あかき木の實

あかき木の實

暗きところのあさあけに、
あかき木の實ぞほの見ゆる。
しかはあれども、晝はまた
君といふ日にわすれしか。
暗きところのゆふぐれに、
あかき木の實ぞほの見ゆる。

硝子切るひと

君は切る、

色あかき硝子の板を。

落日さす暮春の窓に、

いそがしく選びいでつつ。

君は切る、

金剛の石のわかさに。

茴香酒のごときひとすぢ
つと引きつ、切りつ、忘れつ。

君は切る、

色あかき硝子の板を。

君は切る君は切る。

日ごとに

日ごとにわかき姿すがたして
日ごとに歌ふわがどちよ、
日ごとに紅あかき實みの乳房ちちのうで
日ごとにすてて漁あまりゆく。

黄金向日葵

あはれ、あはれ黄金こがね向日葵ひがるま
汝いましまた太陽ひにも倦あきしか、
南國なんごくの空そらの眞晝まひるを
かなしげに疲つかれて廻まはる。

面^{おもて}帕^{ぎぬ}のうしろに見えて、
 その眸^{ひとみ}にほふごとくも、
 空^{そら}いろに透^すきて、葉^はかげに
 今日^{けふ}も咲^さく、なわすれの花。

なわすれぐさ

かへりみ

みかへりぬ、ふたたび、みたび、
 暮^{くれ}れてゆく幼^この歩^{あゆみ}
 なに惜^をしみさしもたゆたふ。
 あはれ、また野^の邊^べの番^{ばん}紅^{こう}花^か
 はやあかきにほひに満^みつを。

目見^ましらみ、うすらなやめば
あまき香^かもつゆにしめりぬ。
さあれ、きみ、こひのうれひは
よひのくち、それもひととき、
かなしみてあらばありなむ、
われもまた、一月はのぼれり。

よひやみ

うらわかきうたびとのきみ、
よひやみのうれひきみにも
ほの沁むや、青みやつれて
木のもとに、みればをみなも。
な怨みそ。われはもくせい、
ほのかなる花のさだめに、

わかき日の夢

水透ける玻璃のうつはに、
果のひとつみづけるごとく、
わが夢は燃えてひそみぬ。
ひややかに、きよく、かなしく。

断

章

六十八

今日もかなしと思ひしか、ひとりゆふべを、
銀の小笛の音もほそく、ひとり幽かに、
すすり泣き、吹き澄ましたるわがこころ、
薄き光に。

二

ああかなし、
 あはれかなし、
 君は過ぎます、
 薫^{くわい}いみじきメロデアのにはひのなかに、
 薄れゆくクラリネットの音^ねのごとく、
 君は過ぎます。

三

ああかなし、
 あえかにもうらわかきあわわが君は、
 ひともとの芥子の花そが指に、香^かのくれなるを
 いと薄きうれひもてゆきずりに觸れて過ぎます。

四

あはれ、わが君おもふ井オロンの静かなるしらべの
 なかに、
 いつもいつも力なくまぎれ入り、鳴きさやぐ驢馬の
 にほひよ、
 あはれ、かの野邊に寝ねて、名も知らぬ花のおもてに、
 あはれ、あはれ、酸^すゆき日のなげかひをわれひとり嗅
 ぎそめてより。

五

暮れてゆく雨の日の何となきものせはしさに
 落したる、さは紅き實^みの林檎、ああ、その林檎、
 見も取らず、冷^{ひや}やかに行き過ぎし人のうしろに、
 灰色の路長さぬかるみに、あはれ濡れつつ
 ただひとつまるびたる、燃えのこる夢のごとくに。

六

あはれ友よ、わかき日の友よ
今日もまた街にいでて少女らに面染むとも
な嘲みそ、われはなほわれはなほ心をさなく、
やはらかき山羊の乳の香のいまも身に失せもあへ
ねば。

七

見るとなく涙ながれぬ。
かの小鳥
在ればまた来て、
茨のなかの紅き實を啄み去るを。
あはれまた、
啄み去るを。

九

あはれ、目の
 かりそめのものなやみなどてさはわれの悲しく、
 窓照らす夕日の光さしもまた涙ぐましき、
 あはれ、世にわれひとり残されて死ぬとならねど、
 わが側かた遠く去るとも人のまた告げしならねど、
 さなり、ただ、かりそめのかりそめのなやみなるにも。

八

女子よ、
 汝はかなし、
 のたまはぬ汝はかなし、
 ただひとつ、
 一言ひとことのわれをおもふと。

十

あはれ、あはれ、色薄きかなしみの葉かげに、
 ほのかにも見いでつる、われひとり見いでつる、
 青き果みのうれひよ。
 あはれ、あはれ、青き果のうれひよ。
 ひそかにも、ひそかにも、われひとり見いでつる
 あはれその青き果のうれひよ。

十一

酒を注つぐきみのひとみの
 ほのかにも濡れて愁うれふる。
 さな病みそ街まちのどよみの小夜さよふけて遠く沁ひむとも。

十二

女、汝はなにか欲りする。

ゆふぐれの、ゆふぐれのゆめふかきものにはひに、
かくもまた汝とともに接吻けて接吻けて、接吻けて

ほのかにも泣きつつあらば、

あはれ、また、なにの願か身にあらむ、あわさるをなほ、

女、汝はなにか欲りする、

ゆふぐれの、ゆふぐれのふたつなき夢のさかひに。

十三

なやましき晩夏ばんなつの日に、

夕日浴び立てる少女の

餘念よねんなき手にも揉もまれて、

やはらかににじみいでたる

色あかき瓜つぼくれなるの花。

十四

わが友よ。

君もまた色青きペバミントの酒に、

かなしみの酒に、

いひしらぬ慰藉なぐさのしらべを、

今日の日のわがごとくも、

あはれ友よ、思ひ知り泣きしことのありや。

十五

あはれ君、われをそのごと

清しとな正しとなおもひたまひそ。

われはただ強ひて清かり。

失せもあへぬそのかみの日の怯おそれたる弱きころ

に、

ああかなし、われはさは強ひて清かり。

十七

『口にな入れた。』
 色紅くかなしき莓葉かげより今日も呼びつる。
 『口にな入れそ。』

十六

哀知る女子のために、
 われはいま黄金なす向日葵のもとにうたふ。
 哀知る女子のために。

十八

われはおもふかの夕ありし音色を。
いと甘き梔くちなしの映はえあかるにはひのなかに、
埋れつつ愁ふともなくただひとりありけるほどよ、
哀あはれさは通りすがりのちやるめらの肩をかへつつ、
ひとりうれひ——ひいひゆるへうと荷擔かたぎ夫の吹きも
ゆきしを。

哀れまた夕日のなかに消えがてに吹きも過ぎしを。

十九

嗚呼あはさみし哀あはれさみし、
今日けふもまた都大路みやこおほぢをさすらひくらし、
なにものか求めゆくとてさすらひくらし、
日をひと日ただあてもなうさすらひくらす。
嗚呼あはさみし哀あはれさみし。

いとけなき女の子に
 しかすとはあらねど、
 たはむれにきかしぬる
 わかき日の歌よ。
 わが戀ふる君も知らねば。

二十一



二十

大ぞらに入日のこり、
 空いろにこころ顫ふ。
 初戀の君をおもふ
 われの未練ぞ、
 わはれさは暮れはつるらむ。

二十二

わが友はいづこにありや。

晩秋ばんあきの入日のあかさ、さみしらにひとり眺めて、

掻かいさぐるピアノの鍵けんの現うつなき高音たかねのははり。

かくてはや、獨身ひとりみの、獨身ひとりみの今日けふも過ぎゆく。

二十三

彌古いよりて大理石だいりしはいよよ眞白ましろに、

彌古いよりてかなしみはいよよ新あらたらし、

彌古いよりて彌清いよく、いよよかなしく。

二十四

泣かまほしさにわれひとり、
 冷やき玻璃戸に手もあてず、
 窓の彼方はあかあかと沈む入日の野を見ゆる。
 泣かまほしさにわれひとり。

二十五

柔かきかかる日の光のなかに、
 いまひとたびあはれ、いまひとたび、
 ほのかにも洩らしたまひね、
 われを戀ふと。

二十七

そを思へばほのかにゆかし。

その古りし朱塗しゆぬりのうつは、

そがなかに薰くむりにし

馬尼拉煙草マニラタバコよ。

いつの日のゆめとわかねど。

二十六

蟬も鳴く、ひと日ひねもす、

『かなし、かなし、あゝかなし、今日けふなほひとり。』

二十八

あはれ、あはれ、すみれの花よ。

しをらしきすみれの花よ。

汝はかなし、

色あかき煉瓦の竈かまの

かげに咲く汝はかなし。

はや朝明あさあけの露ふみて

われこそ今いまし妹いもうとの骨ひろひにと來しものを。

二十九

青梅に金の日光り、

地は濡れて鈴蟲鳴く。

日暮らしの日暮らしの雨の絶間たえまに、

いつしらず鈴蟲鳴く。

三十一

いまもなほ

ワグネルのしらべに

日をひと日浮身をや窶あぶしたまへる。

かなしきは女ぞかし。

離さかり來て野邊のべにおもへば

露くさの花の色だにさはひとり求とめわぶるなる。

三十

おはれさはうち鄙ひなびたる

いはけなき玉乗の子が危あぶなげの足にあはせて、

かすかにも弾き鳴らす井オロン弾きの少女。

三十二

わが友は色あかき酒を飲みにき、
 われはサイダア、
 あはれかかる淡つけき愁もて
 わかき日をや泣かむとする、弱き子の心ぼさよ。

三十三

あはれ、去年病みて失せにし
 かのわかき辯護士の庭を知れりや。
 そは、街の角の貸家の
 襦めはてし飾硝子の戸を覗け、草に雨ふり、
 色紅き罌粟のひともと濡れ濡れて燃えてあるべし。
 あはれまた、そのかみの夏のごとくに。

三十四

ああ、あはれ、
 青にふき救世軍の
 汚よどれたる硝子戸のまへに
 向日葵ひぐるま咲き、
 濠端ほりばたを半纏はんてんひとりペンキ壺かじさげて過ぎゆく。
 いづこにか物賣の笛、
 ああ、ひと目——日の夕、
 われはいま忙せはしなの電車より。

三十五

縁日えんじちの見世ものの、臭くさき瓦斯にも面おもてうつし、
 怪しげの幕のひまより活動寫真くわつどうしやうの色は透かせど、
 かくもまた廉白粉れんぱくの、人込ひとごみのなかもありけど、
 さはいへど、さはいへど、わかき身のすべもなさ、涙な
 がるる。

三十六

鄙ひなびたる鋭とき呼よ子こそをきけば涙ながるる。
 いそがしき活くわつ動どう寫しゃ真しん煤ばいびたる布ぬいに映すと、
 かりそめの場末の小屋に瓦斯の火の消え落つる時、
 鄙ひなびたる鋭とき呼よ子こそをきけば涙ながるる。

三十七

あはれ、あはれ、
 色青き幻燈を見てありしとき、
 なになればたづきなく、かのごとも涙ながれし
 いざやわれ、倶楽部にゆき、友をたづね、
 紅くれなゐのトマト切り、ウキスキイの酒や呼ばむ、
 ほこりあるわかき日のために。

三十八

瓦斯の火のひそかにも聲たつるとき、
 われ、君を悲しとおもひ、
 靴ぬぎの皮に
 踵なる土踏みなすり、
 別れ来て、土踏みなすり、
 ほの黄なるしめり香の、かの苑の香を嗅げば、
 いまさらに涙ながる……

三十九

断
 53 章
 忘れたる、
 忘れたるにはあらねども……
 ゆかしたも、戀ひしともなきその人の
 なになればふともかなしく、
 今日の日、薄暮のなにかさは青くかなしき。
 忘れたる、
 忘れたるにはあらねども……

四十

つねのごと街まちをながめて
 ナイフ執りフオク執り、女らに言葉かはせど、
 色赤きキュラソオの酒さかづきにあるは満たせど、
 かなしみはいよいよ去らず、
 かにかくにわかき身ゆゑに涙のみあふれいでつつ。

四十一

かかるかなしき手つきして、
 かかる音ねにこそ弾ねきにしか、
 かかるかなしきその日の少女をとめ。

四十二

あかき果は草に落ち、

露に濡れて、

日をひと日戦きぬ、かくてまた香だに立て得じ。

雨霽れて、日の射せば、甘く、かなしく、

物求食り、物求食り、寄りも来る音の

レグホンの雄の鶏の、あはれそがけたたましさよ。

四十三

葬式の歸途にか、戯れに笛吹き鳴らし、

もの甘き霽の内さざめきてたどる樂師よ。

哀れ、汝ら、

薄ぐらき路次の長屋にひと時の後やあるらむ。

さはれなほ吹き鳴らし吹き鳴らし長閑に消えつつ、

うら若き服の鄙びのいる赤く、なにか眺むる。

日はしばし夢の世界に目を放つ、黄金の光。……

四十四

顔のいろ蒼ざめて
 ゆめ見るごとき眼眸まなこ
 今日もまたわかき男、
 空をのみ空をのみ見やりて暮らす。

四十五

長き日の光に倦うみて
 熟うれし木の果は
 やはらかき吐息もて地にぞ落ちたる。
 またひとつ……そよとだに風も吹かねど。

四十六

かなしかりにし昨日きのさへ、
 かなしかりにし涙なみださへ、
 明日あすは忘れむ肥ふ満とれる君よ。

四十七

廢すたれたる園のみどりに
 ふりそそぎ、ふりそそぎ、にほやかに小雨はうたふ。
 罌粟けしよ、罌粟けしよ、
 やはらかに燃えもいでね……………

四十八

なにゆゑに汝は泣く、
 あたたかに夕日にほひ、
 たんぼほのやはき溜息野に蒸して甘くちらぼふ。
 さるを女、
 なにゆゑに汝は泣く。

四十九

あはれ、人妻、
 ふたつなきフランチエスカの物語
 かたらふひまも、みどり兒は聲を立てつつ、
 かたはらを匍ひもて歩りく。
 君はまた、たださりげなし。
 あはれ、人妻。

五十一

色赤き三日月、
 色赤き三日月、
 今日もまた臥床ふしどに
 君が兒は銀笛のおもちやをぞ吹く、
 やすらけきそのすさびよ。

五十

いかにせむ………
 やはらかに
 眼も燃えて、
 ああ君は
 唇をさしあてたまふ。

五十二

柔らかなる日ざしに
張物する女、
いろいろの日ざしに
もの思ふ女、
柔らかなる日ざしに
張物する女。

五十三

われは怖る、
その宵のたはむれには似もやらで、
なにごとくも忘れたる
今朝の赤き唇。

五十四

いそがしき葬儀屋のとなり、
 驛えき遞ていの局に似通ふ兩替りょうがへのペンキの家に、
 われ入りて出づる間まもなく、
 折よくも電車むかへて、そそかしく飛びは乗りつれ。
 いづくにか、行きてあるべき、
 ただひとり、ただひとり、指すかたもなく。

五十五

明日あすこそは
 面かほも紅めず、
 うちいでて、
 あまりりす、眩まはゆき園を、
 明日こそは
 手とり行かまし。

五十六

色あかきデカメロンの
書かみに肱つき、

なにごとをか思ひわづらひたまふ。

わかうどの友よ、

美しきかかる日の夕暮に、さは疎うとくたれこめてのみ、
なにごとをか思ひわづらひたまふ。

五十七

あはれ、鐵雄、

静かなる汝なが顔の蒼さよ、

聲もなきは泣きやしつる、

たよりなき闇の夜を

光りて消ゆる花火に。

五十八

ほの青く色ある硝子、
透かし見すれば
内部なる耶蘇の龕みくらにひとすぢの香かたちのぼる。
街まちをゆき透かし見すれば
日の眞晝ものの静かにほのかにも香たちのぼる。

五十九

薄青き齒科しよくわ醫いの屋やに
夕日さし、
ほのかにも硝子は光る。
あはれ女、
その戸いでていつちにかゆく……………
黄なる陽ひに汝なを見れば
われもまたほの淡き齒痛をおぼゆ。

六十

あはれ、あはれ、
 灰色の線路にそひ。
 ひとすぢの線路にそひ、
 今朝もまた辿りゆく浅葱服あさぎのわかき工夫、
 汝もまた路のゆくてに
 青き花をか求むる、
 かなしき長さあゆみよ。

六十一

新詩社にありしそのかみ、
 などてさは悲しかりし。
 銀笛を吹くにも、
 ひとり路をゆくにも、
 歌つくるにも、
 などてさは悲しかりし、
 をさなかりしその日。

六十三

かかる窓ありとも知らず、昨日^{きのふ}まで過ぎし河岸^{かはぎし}。
 今日^{けふ}は見よ、
 色赤き花に日の照り、かなしくも依依^{ええ}兒^{てる}句ふ。
 わはれまた病^やめるピアノも………

六十二

『かくまでも、かくまでも、
 わかうどは悲しかるにや。』
 『さなり女^{をんな}、
 わかき日には、
 ましてまた才^{さい}ある身には。』

六十四

わかうどのせはしさよ。
 さは昨日世をも厭ひて重格魯密母求めて泣きしか、
 今朝ははや林檎吸ひつつ霧深き河岸路を辿る。
 歌樂し、鳴らす木履に………

六十五

夕暮のものあかき空
 その空に百舌啼きしきる。
 ウキスキイの饅の列
 冷やかに拭く少女、
 見よ、あかき夕暮の空、
 その空に百舌啼きしきる。

六十六

夕日はなやかに、
 こほろぎ啼く。
 あはれひと日木の葉ちらし吹き荒みたる風も落ちて、
 夕日はなやかに、
 こほろぎ啼く、

六十七

美しくしきソフィヤの君。
 悲しくも戀しくも見え給ふわがわかきソフィヤの君。
 なになれは日もすがら今日はかく瞑目り給ふ。
 美しくしきソフィヤの君、
 われ泣けば朝な夕なに、
 悲しくも静かにも見ひらき給ふ青き華、少女の瞳。
 ソフィヤの君。

六十八

失くしつる。

さはあるべくもおもはれね

またある日には、

探しなば、なほあることもおもはるる。

色青き眞珠のたまよ。

酒の徴

一

金の酒をつくるは
かなしき父のおもひで、
するどき歌をつくるは
その兒の赤き哀歡あはれ

からの花の實になる
 春のすゑのさみしや。
 酒をしぼる男の
 肌さへもひとしほ。

二

金の酒をつくるも、
 するどき歌をつくるも、
 よしや、またわかき娘の
 父知らぬ子供生むとも……

三

酒袋さかぶくろを干すとして

ぺんぺん草をちらした

散らしてもよかる、

その實みとなるもせんなし

四

酩もとすり唄のこころは

わかき男の手にあり。

擡かひをそろへてやんさの、

そなた戀しと鳴らせる。

五

麥の穂づらにさす日か、
酒屋男さかやをとこにさす日か、
軽ろく投げやるころの
けふをかぎりのあひびき。

六

人の生るもとすら
知らぬ女子をんなのころに、
誰たが馴れ初めし、酒屋の
にほひか、麥のむせびか。

八
 櫛^{はじ}の實^み採^との來^きる日に
 百^も舌^ず啼^なき、人もなげきぬ、
 酒をつくるは朝あけ、
 君へかよふは日のくれ。

七
 からしの花も實となり、
 麥もそろそろ刈らるる。
 かくしてはやも五月は
 酒量^{ばか}る手にあふるる。

十

足をそろへて磨ぐ米、
 水にそろへて流す手、
 わかいさびしいころの
 歌をそろゆる朝あけ。

九

ところも目をも知らねど、
 ゆるししひとのいとしさ、
 その名もかほも知らねど、
 ただ知る酒のうつり香。

十一

ひねりもちのほひは
わが知る人も知らじな。
頑かたくなのひとゆゑに
何時いつまでひねるころぞ。

十二

微ほかに消えゆくゆめあり、
酒のほひか、わが日か、
倉の二階にのぼりて
暮春をひとりかなしむ。

十三

さかづきあまたならべて
 いづれをそれと嘆かむ、
 利酒きさけすなるころの、
 せんなやわれも酔ひぬる。

十四

その酒の、その色の、にはひの
 口あたりのつよさよ。
 おのがつくるかなしみに
 囚とられて泣くや、わかうど。

十六

ほのかに忘れがたきは
 酒つくる日のをりふし、
 ほのかに鳴いて消えさる
 青い小鳥のこころね。

十五

酒を醸すはわかうど、
 心亂すもわかうど、
 誰とも知れぬ、女の
 その兒の父もわかうど。

十八

計量機カンカンに身を載せて
 量るは夏のうれひか、
 薊の花を手にもつ
 裸男の酒の香。

十七

酒屋の倉のひさしに
 薊のくさの生ひたり、
 その花さけば雨ふり、
 その花ちれば日ひてる。

二十

目ざまし時計の鳴る夜に
 かなしくひとり起きつつ
 倉を巡回まはればつめたし、
 月の光にさく花。

十九

かなしきものは刺あり、
 傷きずつき易きころの
 しづかに泣けばよしなや、
 酒にも徹びのほひぬ。

二十二

倉の隅にさす日は
 徹ほかに光り消えゆく、
 古りにし酒の香にすら、
 人にはそれと知られず。

二十一

わが眠る倉のほとりに
 青き光放つものあり、
 螢か、酒か、いの寝ぬ
 合カツカノ歡木のうれひか。

二十四

銀の釜に酒を湧かし、
 金の釜に酒を冷やす
 わかき日なれや、ほのかに
 雪ふる、それも歎かじ。

二十三

青葱とりてゆく子を
 薄日の畑にながめて
 しくしく痛む^{いた}ころに
 酒をしぼればふる雪。

二十五

夜ふけてかへるふしどに
かをるは酒か、もやし、か、
酒屋男のところに
そそぐは雪か、みぞれか。

見はてぬ夢

泊芙藍

罇入りし珈琲碗に

泊芙藍のくさを植ゑたり。

その花ひとつひらけば

あはれや呼吸のをのく。

昨日を憎むころの陰影にも、時に顛へて

ほのかにさくや、さふらん。

目のふちの青き年増や泣かすらん。
 過ぎし日のうつつなかりしためいきは
 淡ら雪赤のマントにふるごとく、
 おもひでの襟のびろうど身にぞ沁む。
 吹き馴れし銀のソブラの身にぞ沁む。
 過ぎし日の、その夜の言はで過ぎにし片おもひ。

見果てぬ夢

過ぎし日のしづこころなき口笛は
 日もすがら葦の片葉の鳴るごとく
 ジブシイの晝のゆめにも顫ふらん。
 過ぎし日のあどけなかりし哀愁は
 こまやかに匂シヤポンの消ゆるごと

いと紅あかき林檎の實をば
 明日こそはわたへむといふ。
 さはあれど、女の友は
 何時いつもそを持ちてなかりき。
 いと紅あかき林檎の實をば
 明日あすこそはわたへむといふ。

あかき林檎

初恋

薄らあかりにあかあかと
 踊るその子はただひとり。
 薄らあかりに涙して、
 消ゆるその子もただひとり。
 薄らあかりに、おもひでに、
 踊るそのひと、そのひとり。

カステラ

カステラの縁ふちの澁しぶさよな、
 褐色かほいろの澁しぶさよな、
 粉こなのこぼれが眼まなこについてね、
 ほろほろと泣なかるる。
 ほんに、何なにとせう、
 赤あかい夕ゆふ日に、うしろ向むかいて
 ひとり植うゑた石竹。

水蟲の列

朽くちた小舟こぶねの舟ふねべりに
 赤あかう列なみゆく水蟲みづむしよ、
 そつと觸ふればかつ消きえて、
 またも放はなせば光ひかりりゆく。

ふるさと

人もいや、親もいや、
 小さな街が憎うて、
 夜ふけに家を出たれど、
 せんすべなしや、霧ふり、
 月さし、壁のしろさに

こほろぎがすだくよ、
 堀の水がなげくよ、
 爪さき薄く、さみしく、
 ほのかに、みちをいそげば、
 いまだ寝ぬ戸の隙より
 灯もさし、菱の芽生に、
 なつかし、沁みて消え入る
 油搾木のしめり香。

瞬間たぎにほのぼのとくちつけて
 消えにしを、落ちにしを、その一夜ひとよ。
 さるになど光ある御空より
 君はまた香かを求め泣き給ふ。
 あな、あはれ、その一夜、泣きにしは
 君ならじ、そのかみのわが少女。

泣きにしは

美はしき、そは兎とまれ、人妻よ。
 ほのかにも唇くちふれて泣きにしは、
 君ならじ、我ならじ、その一夜ひとよ。
 青みゆく蠟ろうの火と月光つきかげと、
 儼すえてゆく無花果と、日のかげと、

時は逝く

時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく、
穀倉の夕日のほめき、
黒猫の美しくしき耳鳴のごと、
時は逝く。何時しらず柔かに陰影してぞゆく。
時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

片戀

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

かはたれの秋の光にちるぞえな。

片戀の薄着のねるのわがうれひ

「曳舟」の水のほとりをゆくころを。

やはらかな君が吐息のちるぞえな。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

ひとはひとゆゑ身のほそる、
 芥子がちらうとちるまいと、
 なんのこの身が知るものぞ。
 わたしはわたし、
 芥子は芥子、
 なんのゆかりもないものを。

芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。
 ひとが泣かうと泣くまいと
 なんのその葉が知るものぞ。

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥
 昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。
 鳴きそな鳴きそ春の鳥、
 歌澤の夏のあはれとなりぬべき
 大川の金と青とのたそがれに。
 鳴きそな鳴きそ春の鳥。

あらせいとう

人知れず袖に涙のかかるとき、
 かかるとき、
 あらせいとうのたねを取る。
 ひとり泣いてはたねを取る。
 あかあかと空に夕日の消ゆるとき、
 植物園に消ゆるとき。

わがこころの傾斜スロウアップ面に、
 滑りつつ君のうれひはすすり泣けり。
 よろこびもすすり泣けり。
 悪縁あくえんのふかき恐怖おそれもすすり泣けり。
 八月の傾斜スロウアップ面に、
 美しくしき金きんの光はすすり泣けり。

あひびき

八月の傾斜スロウアップ面に、
 美しき金きんの光はすすり泣けり。
 こほろぎもすすり泣けり。
 雑草みどりの縁みどりもともにすすり泣けり。

さめざめとときになみだし、
 ゆふかけてさやぎいづとも、
 かなしみはいよよおろかに、ながねひきいよよつめ
 たし。
 あはれよのしろきねどこの
 まくらべのベコニヤのはな。

あそびめ

たはれをのかずのまにまに
 じだらくにみをもちくづし、
 おしろいのあをきひたひに
 ねそべりてひるもさけのみ、

い
つ
そ
み

罪びと

光りかがやく槍ふすま、
素肌すはだにうけて身みじろがね、
あまりにそそぐ日の光、
あはれみたまへと目をつぶる。

人妻ゆゑにひとのみち
 汚しはてたるわれなれば、
 とめてとまらぬ煩惱ぼんごうの
 罪のやみぢにふみまよふ。

野晒

死なむとすればいよいよに
 命戀しくなりにけり、
 身を野晒のざらしになしはてて、
 まことの涙いまぞ知る。

涙

常住じやうちゆうだん不斷のかなしみに
 ながるるものはわが涙、
 常住不斷のよろこびに、
 こぼれ落つるもわが涙。

なまじおもへば

なまじおもへばいよいよに
 光りつめゆくわがいのち。
 いなさほろえ細江のみをつくし
 光りつむれば目もつまる。

自愛

眞實^{しんじつ}心^{こころ}ゆゑあやまられ、
眞實^{しんじつ}心^{こころ}ゆゑたばかり。
しんじつ口^{くち}惜^やしとおもへども、
しんじつ此^{こゝ}身^みが棄^すてられず。

眞實

眞實^{しんじつ}なりと誰^{たれ}かいふ、
眞實^{しんじつ}ならずと誰^{たれ}かいふ。
麗^{うつく}らかなれども、また寒^{ひや}く、
水^{みづ}は樋^ひをこそすべるなれ。

幻滅

眞まことと見しは影なりき、
 鏡の中の百合の花
 現身うつらみながら夢なりき、
 晝よるなりけれど夜よるなりき。

二人で居たれど

二人で居たれどまだ淋し、
 一人になつたらなほ淋し、
 しんじん二人は遣瀬やるせなし、
 しんじつ一人は堪へがたし。

肖像

あたり眩まばゆきわが姿、
 ふつと寂しくなる時は、
 鏡に影のみのこし置き、
 眞まことの己おのれは飛び去りぬ。

ふたつの鏡

いづれが影か、かがやかに、
 いづれが眞まことえもわかぬ。
 鏡を鏡と照りあはせ、
 光りてをのくわがこころ。

巡禮

眞實諦あきらめ、ただひとり、
 眞實一路の旅をゆく。
 眞實一路の旅なれど、
 眞實、鈴ふり、思ひ出す。

現

現うつに醒さめて、麗うららかに
 物思ふこそうれしけれ。
 現身うつならで知りがたき
 このよろこびを泣きてよろこぶ。

薔
薇
の
木

薔薇の木

薔薇の木に、

薔薇の花さく。

なにごとの不思議なけれど。

光あふるる蕙かづら、
ゆりうごかすは日の光。
ただ日の光、日のしづく。

一

日 光

一

兩掌もろてそるへて日の光掬すくふ心ぞあはれなる
掬へど掬へど日の光、
光りこぼるる音もなく。

佇　立

海まんまんとうねれども、
 不二れいろうとおはせども、
 佇たたずむものはわれひとり、
 こぼるるものはわが涙。

麗日展望

麗らかや、
 見わたせば帆かけふね、
 玲瓏れいろうと不二ふじのみね。

ながるるみづはいつしんに
 ひかりみなぎり、をどりゆく。
 いつほんかかるまるきばし、
 うをはそのへをとびこゆる。

をがは

やさい

ぎんのさかなのとびはぬる
 やさいばたけにきてみれば、
 ぎんのさかなをとらへむと、
 やさいあはててはをみだす。

ながめ
 かがやくものはみなきえぬ、
 きえたるものはまたひかる、
 ひかり、きえ、
 きえ、ひかり、
 ひかりつきせず、しよんがいな。

か
 ぜ

かぜふく、きえしかがやきを、
 ふきそよがしてひかりゆく、
 のはらいちめんかがやかに、
 てりかがやかし、わすれゆく、

海 雀

うみすずめ うみすずめ
海雀、海雀、

ぎんの てん てん 海雀、

波ゆりくればゆりあげて、

波ひきゆけばかけ失する、

海雀、海雀、

ぎんの てん てん 海雀。

つなで

ひかりかたまりなきまるび、

をんなこどもはなにすとか、

をんなこどもはつなでひく、

かがやくうみをばひきあぐる

2.50
1939-10-7

大正四年四月廿八日印刷
大正四年五月三日發行

定價金九拾五錢

著作權
所有

著者 北原白秋
發行者 東京市麻布區坂下町十三番地 北原鐵雄
印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 淺野榮作
印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發行所
發賣元

東京市麻布區坂下町十三番地 阿蘭陀書房
東京市神田區表神保町三番地 振替東京一四四八九番
合資會社 東京堂書店
電話本局一二三番
振替東京二七〇番

